

黄鶴楼送孟浩然之広陵

札幌市医師会
札幌徳洲会病院

奥山 淳

故人西辞黄鶴楼
煙花三月下揚州
孤帆遠影碧空尽
惟見長江天際流

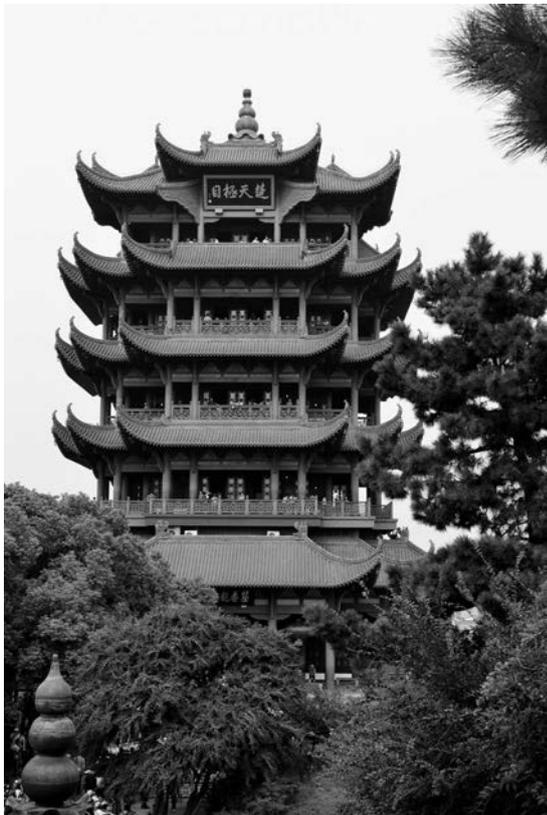
この漢詩は唐代の詩人李白のもので、友人の孟浩然が長江を下って広陵へ行くときに詠んだものです。学生時代の古文の教科書に出ていて印象に残っていました。

2017年の全日空カレンダーの6月が黄鶴楼でして、実際に観てみようと思いついて、同年9月に2泊3日でマイレージを利用して武漢に行ってきました。

太古より建造、焼失を繰り返し、現在のものは1985年に建造されたものです。

正味1日の弾丸ツアーでしたが、長江も黄鶴楼もこの目で見てきて、今となっては貴重な体験でした。

新型コロナウイルスが早く終息することを願っています。



桜に想う

渡島医師会
宮村内科医院

宮村 康子

北海道に居を移してかれこれ30年を過ぎましたが、毎年3月を過ぎると南からの桜前線の便りが日々上がってくるのが楽しみになります。

函館は3月半ばごろから日の光が柔らかくなり、春の訪れを感じることができるようになります。そして桜とともに多くの花々が、まるで寒い冬のうっぶんを晴らすように咲き始めます。転居して間もないころですが、一度に桜や梅、そのほかの花々が咲き、風景が一変するのに感動したのを覚えています。

桜の開花は多くの日本人にとって、春の訪れを感じさせます。淡いピンクで、一つ一つの花は主張しないが一度に開花して樹木を覆い、かつ見事に散ってゆく桜を嫌いな日本人はいないでしょう。

「桜」という言葉が初めてはつきりと出てきたのは奈良時代に編集された「万葉集」で、当時の日本人は桜の木を神聖なものと考えていたようです。一説によりますと、「サクラ」の「サ」という字ですが、これは「サ神」を表しており田んぼの神様であり、次に「クラ」というのは神様が鎮座する「台座」のことで、桜の花が咲くことは、田んぼの神様が山から下りてこられたと考えられ、神様を迎えるために食物や酒をお供えしてお祝いしていました。これがお花見の起源で、当時は桜の花が咲く頃が田植えの時期であったようです。

現在のお花見の宴は平安時代、後醍醐天皇が始めたといわれています。当時は貴族に限られていました。やがて武士の時代になり鎌倉時代以降になると武士、庶民に広がっていきます。江戸時代、徳川吉宗が以前から長雨ですぐ氾濫し農村部に被害を及ぼす隅田川に防波堤を作り、川沿いに桜の木を植えました。これにより多くの人が集まり、今ですぐに削られていった地面が固められ、驚くほど水害が減ったといわれています。

古来より私たちは卒業、入学、出会い、別れなどさまざまな自分の人生の一場面をそれぞれ桜に重ね合わせて花を眺めています。そして、絶対忘れてはならないのは70数年前に「離れ離れに散ろうとも花の都の靖国神社春の梢に咲いて会おう」（同期の桜の5番目の歌詞です）と励まし合って戦った若き戦士たちのことであり、私たちは桜を愛で、感謝とともに彼らの思いを心に留め置き、日々争いごとのない世の中を作るよう努めなければと思います。

念のためですが、私は前回の東京オリンピックの記憶はありますが、戦後生まれです。